

1981年から1985年に山口県で発生した食中毒

山口県衛生研究所(所長: 田中一成)

松崎 静枝・片山 淳・山縣 宏・田中 一成

山口県衛生部環境衛生課(課長: 岡崎義男)

中野 壽美生・関屋 建三・岡崎 義男

The Epidemiological Data of Food Poisoning in Yamaguchi Prefecture from 1981 to 1985

Shizue MATSUSAKI, Atsushi KATAYAMA,
Hiroshi YAMAGATA, Kazushige TANAKA

Yamaguchi Prefectural Research Institute of Health (Director: Dr. Kazushige TANAKA)

Sumio NAKANO, Kenzo SEKIYA, Yoshio OKAZAKI

Section of Environmental Hygiene, Division of Public Health,

Yamaguchi Prefectural Government (Director: Yoshio OKAZAKI)

はじめに

前報¹⁾に引き続き、1981年から1985年の5年間に山口県内で発生した食中毒について集約した。

方法

山口県食中毒事件録(山口県衛生部環境衛生課)刊^{2~6)}を基礎として、年次別、保健所別、月別、原因食品別、病因物質別、接種場所別、原因施設別発生状況等について検討を加え、全国食中毒発生状況^{7~11)}と併せて考察した。

結果

1 年次別食中毒発生状況(表1)

事件数は年間15~21, 患者数376~842, 死者数0~2で、5年間に事件数82, 患者数2960, 死者数3を記録した。これらは全国食中毒のそれぞれ1.5%, 1.6%, 4.2%を占める。1件あたりの患者数は平均36名であった。注目を集めた事件例として、

サルモネラ(*S. java*)食中毒(患者数37, 1982年)¹²⁾, ウェルシュ菌食中毒(患者数326, 289, 1983年)¹³⁾, クサウラベニタケによる食中毒(患者数6, 3, 1983, 1985年)^{13, 15)}, イシナギの肝臓によるビタミンA食中毒(患者数6, 25, 1984年)¹⁴⁾などが挙げられる。

全国では、新設スーパーマーケットの飲料水を原因とした毒素原性大腸菌とカンピロバクター・ジェジュニによる大型食中毒(北海道、患者数7,751, 1983年)^{15, 16)}や12都県にまたがり患者36名, 死者11名を出した熊本県の真空パック「からし蓮根」によるボツリヌス食中毒^{17, 18)}などが注目を集めた。

2 保健所別発生状況(表2)

1保健所あたりの事件数は0~16, 患者数0~660, 死者数0~2である。事件数が多いのは徳山, 下関, 山口で, 患者数が多いのは, 下関, 山口, 徳山, 防府である。大島, 長門, 阿東では発生皆無である。

表1 年次別食中毒発生状況

年	件数		患者数		死者数	
	山口県	全国	山口県	全国	山口県	全国
1981	16	1,108	376	30,027	1	13
1982	18	923	445	35,536	0	12
1983	15	1,095	842	37,023	0	13
1984	12	1,047	646	33,084	0	21
1985	21	1,177	651	44,102	2	12
計	82	5,350	2,960	179,772	3	71

表2 保健所別食中毒発生状況 (1981~1985)

	大島	岩国	玖珂	柳井	徳山	防府	山口	宇部	厚狭	美祢	豊田	豊浦	長門	萩	阿東	下関	計
事件数	0	7	1	2	16	5	11	9	4	3	2	6	0	4	0	12	82
患者数	0	183	60	24	438	408	440	246	92	16	90	143	0	160	0	660	2,960
死者数	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3

3 月別発生状況 (表3)

7~9月に事件数, 患者数とも多発し, この時期の発生が事件数の66%, 患者数の61%にのぼった。11月, 12月の患者数が多いのは大規模食中毒による。

全国では5~10月に多発 (事件数83%, 患者数78%) し, なかでも7~9月の3か月間に事件数の62%, 患者数の46%が発生している。

4 原因食品別発生状況 (表4)

事件数60 (73%), 患者数1918 (65%), 死者数3 (100%) は原因食品が判明した。事件数は魚介類によるものが多く, 穀類, 複合調理食品によるものがこれに次いだ。患者数は複合調理食品, 魚介類によるものが多くみられた。死者は魚介類 (ふぐ) 及び複合調理食品によるものである。

全国では魚介類によるものが事件数, 患者数とも多くみられ, 次いで複合調理食品, 穀類であった。死者数は魚介類によるものが最も多く, そのほとんどはふぐによる。

表3 月別食中毒発生状況 (1981~1985)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	
事件数	山口県	0	3	3	4	2	3	14	25	15	6	5	2	82
	全国	175	116	145	156	289	359	917	1,383	1,021	457	140	192	5,350
患者数	山口県	0	47	34	35	161	31	669	656	490	75	469	293	2,960
	全国	7,107	4,076	5,977	8,978	13,373	23,795	23,940	25,719	32,617	21,147	6,919	6,124	179,772
死者数	山口県	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
	全国	5	6	5	4	4	17	4	5	5	6	4	6	71

表4 原因食品別食中毒発生状況 (1981~1985)

	魚介類 ふぐ その他	肉類	卵類	乳類	穀類	野菜類	菓子類	複合調理食品	その他	不明	計		
事件数	山口県	5	19	4	0	0	1	2	1	28	0	22	82
	全国	127	1,169	108	67	10	493	340	73	498	550	1,915	5,350
患者数	山口県	8	654	405	0	0	2	9	5	835	0	1,042	2,960
	全国	193	30,242	5,266	2,141	101	9,226	8,097	2,329	23,646	31,409	67,122	179,772
死者数	山口県	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
	全国	41	2	0	0	0	2	16	0	0	2	8	71

表5 病因物質別食中毒発生状況(1981~1985)

	菌										化学物質		自然毒		不 明	計	
	サルモネラ	ブドウ球菌	ボツリヌス菌	腸炎ビブリオ	病原大腸菌	ウエルシュ菌	セレウス菌	エルシニア・エンテロコリチカ	カンピロバクター・ジェジュニ/コリ	ナグビブリオ	その他*	メタノール	その他	植物性			動物性
事件数	山口県 8	16	0	22	1	2	0	0	7	0	0	0	0	2	8	16	82
全国	516	1,083	9	1,743	140	37	50	0	120	6	133	0	20	299	184	1,010	5,350
患者数	山口県 268	206	0	726	17	615	0	0	549	0	0	0	9	39	531	2,960	
全国	14,847	24,228	51	48,571	23,493	7,275	908	0	17,554	180	12,181	0	320	1,347	921	27,886	179,772
死者数	山口県 0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	3
全国	5	2	12	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	41	3	71	

* 1981, 1982年はウエルシュ菌, セレウス菌, エルシニア・エンテロコリチカ, カンピロバクター・ジェジュニ/コリ, ナグビブリオを包含。

5 病因物質別発生状況(表5)

事件数66(80%), 患者数2429(82%), 死者数3(100%)は病因物質が判明した。事件数, 患者数とも腸炎ビブリオによるものが最も多く, 次いで事件数ではブドウ球菌, カンピロバクターの順であり, 患者数ではウエルシュ菌, カンピロバクターである。死者は動物性自然毒, 腸炎ビブリオによる。

全国では事件数で腸炎ビブリオ, ブドウ球菌, 患者数で腸炎ビブリオ, ブドウ球菌, 病原大腸菌, 死者数で動物性自然毒によるものが多い。

1事件例の平均患者数はウエルシュ菌の307が最も多く, 次いでカンピロバクターの78である。全国ではウエルシュ菌(196), 病原大腸菌(167), カンピロバクター(146)などが1事件例あたりの平均患者数が多い。

6 摂取場所別発生状況(表6)

事件数74(90%), 患者数2597(88%), 死者数3(100%)は摂取場所が判明した。事件数では家庭, 飲食店が, 患者数では飲食店, 家庭が多く, 死者はすべて家庭である。全国では事件数は家庭, 患者数は学校, 死者数は家庭で多くみられた。1事件例あたりの平均患者数は, 山口県, 全国とも学校(山口県130, 全国129)が最も多い。

7 原因施設別発生状況(表7)

事件数69(84%), 患者数2404(81%), 死者数3(100%)は原因施設が判明した。事件数では家庭, 飲食店が, 患者数では学校, 飲食店, 旅館に多くみられた。死者は家庭及びび仕出し屋である。全国では事件数, 患者数とも飲食店が最も多く, 事件数では家庭が, 患者数では学校がこれに次いだ。死者数は家庭が過半数を占めた。1事件例あたりの平

表6 摂取場所別食中毒発生状況(1981~1985)

	家	事業	学	病	旅	飲	そ	不	計
	庭	場	校	院	館	食	他	明	
事件数	山口県 30	6	5	0	0	20	13	8	82
全国	1,893	475	338	54	566	894	616	514	5,350
患者数	山口県 254	145	648	0	0	777	769	367	2,960
全国	37,727	25,358	43,777	1,891	22,597	22,580	17,909	7,933	179,772
死者数	山口県 3	0	0	0	0	0	0	0	3
全国	59	1	0	0	0	5	3	3	71

表7 原因施設別食中毒発生状況 (1981~1985)

		家	事	学	病	旅	飲	販	製	仕	行	採	そ	不	計
		庭	業	校	院	館	食	売	造	出	商	取	の	明	
			場				店	店	所	屋		場	他		
事件数	山口県	16	3	3	0	10	16	5	2	10	0	0	4	13	82
	全国	1,020	159	197	31	589	1,680	170	111	501	14	29	157	692	5,350
患者数	山口県	47	122	612	0	571	580	62	16	268	0	0	126	556	2,960
	全国	4,440	3,499	33,567	1,756	24,007	61,651	2,211	3,495	28,939	114	507	5,112	10,474	179,772
死者数	山口県	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
	全国	40	1	0	0	0	6	2	11	2	0	0	5	4	71

均患者数は山口県，全国とも学校（山口県204，全国170）が際だって多い。

8 原因物質別，病因物質別発生状況（表8）

ふぐと動物性自然毒，魚介類と腸炎ビブリオ，魚介類と動物性自然毒，肉類とサルモネラ，穀類とブドウ球菌，野菜類と植物性自然毒，複合調理食品とブドウ球菌および腸炎ビブリオに関連がみられる。

表8 原因物質別・病院物質別食中毒発生状況（全国：1981~1985）

原因物質	菌										化学物質		自然毒		不 明		
	サルモネラ	ブドウ球菌	ポツリス菌	腸炎ビブリオ	病原大腸菌	ウエルシュ菌	セレウス菌	エルシニア・エンテロコリチカ	カンピロバクター・ジエジニ/コリ	ナグビブリオ	その他	メタノール	その他	植物性		動物性	
魚介類	ふぐ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(5) 126	1	(5) 127
	その他	(1) 53	(3) 92	7	(11) 715	17	2	0	0	1	3	10	0	15	0	(3) 57	(1) 198
肉類	(2) 57	26	0	3	2	(1) 3	0	0	7	0	3	0	0	0	0	(1) 7	(4) 108
卵類	19	29	0	14	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	67
乳類	4	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
穀類	12	384	0	4	1	2	24	0	0	1	15	0	3	1	0	(1) 46	(1) 493
野菜類	5	15	1	22	1	0	0	0	2	0	1	0	0	(2) 285	0	8	(2) 340
菓子類	4	(1) 61	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	7	(1) 73
複合調理食品	(3) 49	(12) 194	0	(8) 136	12	(1) 17	17	0	(1) 4	0	22	0	0	1	0	(3) 46	(28) 498
その他	44	124	0	229	20	2	4	0	19	1	10	0	1	12	0	84	550
不明	(2) 259	152	1	(3) 620	(1) 85	11	5	0	(6) 87	1	71	0	0	0	1	(10) 612	(22) 1,915
計	(8) 516	(19) 1,083	9	(22) 1,743	(1) 140	(2) 37	50	0	(7) 120	6	133	0	20	(2) 299	(8) 184	(19) 1,010	(28) 5,350

* 加工品を含む

** 1981, 1982年はウエルシュ菌，セレウス菌，エルシニア・エンテロコリチカ，カンピロバクター・ジエジニ/コリ，ナグビブリオを包含
() 山口県

考 察

山口県で1981年から1985年の5年間に発生した食中毒は全国の事件数、患者数、死者数のそれぞれ1.5%、1.6%、4.2%を占めた。1976年から1980年の発生数に比較すると、事件数、患者数は山口県、全国ともほぼ横ばいであるが死者数が減少した。特に山口県ではふぐによる死亡者が激減し、全国の死者数に対する割合も7.1%から4.2%へ減少した。1983年は患者数、1985年は事件数が多いが、1983年はウェルシュ菌による大型食中毒が2例¹³⁾(患者数615)発生し、1985年は夏期に腸炎ビブリオ食中毒が多発したことによる。全国では1983年の患者数が多いが、患者数7751の大型食中毒^{15,16)}発生によるものであり、死者数の多い1985年は熊本県を中心に発生し、死者11名を出したボツリヌス食中毒^{17,18)}による。

保健所別にみると、徳山、下関、山口が事件数、患者数とも多い。1976年から1980年の発生件数および患者発生数に比べ徳山での増加が目立つ。長門、萩は発生数が減少し、大島、玖珂、阿東では10年間を通じ各々1事例の発生が報告されたにすぎない。人口の多い地域に発生が多くみられる。

月別では、山口県、全国とも7~9月に発生が多くみられた。これは高温多湿の細菌性食中毒の起こりやすい時期と一致する。

原因食品別にみると、事件数、患者数とも魚介類、複合調理食品によるものが多い(山口県、全国)。1976年から1980年に比べ、山口県、全国とも複合調理食品による食中毒が増えているのは、食生活の複雑化、外食の一般化などが考えられる。ふぐによる食中毒が減少しているのはふぐの販売及び処理を条例で規制する自治体がふえたことや、多くの人がふぐに対する正しい知識を持つようになったためと思われる。一方、これまで発生のみられなかったキノコによる食中毒が2事例発生した。これまで山口県では野生のキノコを食べる習慣があまりなかったが、今後は毒キノコに対する啓蒙も必要であろう。

病因物質が判明したもののうち、事件数、患者数では腸炎ビブリオによるものが、死者数では動物性自然毒によるものが多い(山口県、全国)。この傾向は1976年から1980年の発生とほぼ一致する。1983年以降、厚生省の食中毒統計にウェルシュ菌、カンピロバクターなどが新たに記載されることになり、事件数、患者数ともかなりみられる。また、珍しいビタミンAによる食中毒も1974年¹⁹⁾に次いで2事例¹⁴⁾発生した。

摂取場所は山口県、全国とも事件数の1位は家庭であるが患者数は山口県で飲食店、全国で学校が占めた。これらはいずれも1事件あたりの平均患者数に由来する。

原因施設として全国では事件数、患者数とも飲食店が多いのに対し、山口県ではそれ以外に家庭の発生が多くみられたがその理由は明らかでない。

原因物質別、病因物質別発生状況は従来の傾向と同一であった。

ま と め

1981年から1985年の5年間に山口県で発生した食中毒は事件数82、患者数2960、死者数3で全国発生数のそれぞれ1.5%、1.6%、4.2%を占めた。保健所別では徳山、下関、山口に、月別では7月から9月の3か月間に事件数、患者数とも多発した。原因食品は事件数では複合調理食品、患者数では魚介類によるものが目立った。病因物質は事件数、患者数とも腸炎ビブリオ、ブドウ球菌によるものが多くみられた。摂取場所、原因施設として多いのは事件数で家庭、飲食店、患者数で飲食店、学校、死者数で家庭である。

文 献

- 1) 松崎静枝, 片山淳: 山口衛研業報. (7), 1~5 (1985)
- 2) 山口県衛生部環境衛生課編: 山口県食中毒事件録, 昭和56年. (1982)
- 3) 山口県衛生部環境衛生課編: 山口県食中毒

- 事件録, 昭和57年. (1983)
- 4) 山口県衛生部環境衛生課編 : 山口県食中毒事件録, 昭和58年. (1984)
- 5) 山口県衛生部環境衛生課編 : 山口県食中毒事件録, 昭和59年. (1985)
- 6) 山口県衛生部環境衛生課編 : 山口県食中毒事件録, 昭和60年. (1986)
- 7) 厚生省環境衛生局食品衛生課 : 食品衛生研究. **32**, 81~105 (1982)
- 8) 厚生省環境衛生局食品衛生課 : 食品衛生研究. **33**, 53~77 (1983)
- 9) 厚生省環境衛生局食品衛生課 : 食品衛生研究. **34**, 53~80 (1984)
- 10) 厚生省生活衛生局食品保健課 : 食品衛生研究. **35**, 47~74 (1985)
- 11) 厚生省生活衛生局食品保健課 : 食品衛生研究. **36**, 61~88 (1986)
- 12) 松崎静枝, 片山淳 : 山口衛研業報. (7), 6~9 (1985)
- 13) 松崎静枝ら : 山口獣医学雑誌. (12), 63~66 (1985)
- 14) 稲原輝昭ら : 食衛誌. **26**, 546~547 (1985)
- 15) 白石圭四郎 : 食衛誌. **24**, 516~517 (1983)
- 16) 長尾章郎 : 食品衛生研究. **34**, 13~32 (1984)
- 17) 道家直 : 食衛誌. **26**, 536~537 (1985)
- 18) 厚生省大臣官房統計情報部編 : 昭和59年食中毒統計. p. 24 (1985)
- 19) 後藤章ら : 食衛誌. **23**, 200~201 (1982)